

26) 食道静脈瘤治療に難渋した原発性胆汁性肝硬変症の1例

塚田 一博・畠山 勝義
加藤英雄 (新潟大学第一外科)
吉田 奎介 (日本歯科大学新潟
歯学部外科)
塚田 芳久・野本 実 (新潟大学第三内科)

PBC を基礎疾患とした食道静脈瘤治療において難渋した症例を経験したので報告する。症例は35歳、女性。1979年3月第2子出産後発症。肝生検にて PBC の診断 (Scheuer 分類I期)。1984年12月の肝生検にて、Scheuer 分類II期と増悪。このとき F1, RC (-) の食道静脈瘤を認めた。その後、F2, RC (++) と食道静脈瘤の増悪を認めたため1985年10月食道離断術施行。術直後より血清総ビリルビンの漸増をみた。術後 FIRC (-) と改善をみたが、直達手術後約1年7ヶ月の1987年8月食道静脈瘤 (F2, RC (+++)) に悪化よりの出血が認められ EIS 施行。再び出血がみられ PTO 施行。出血が続くため下腸間膜静脈・卵巣静脈シャント術施行。静脈瘤よりの出血、増悪がみられる毎に EIS を施行したが1990年3月肝不全にて死亡。併用療法にて食道静脈瘤よりの出血はなんとかコントロール可能であった。

27) 門脈血栓を認めた胆道感染症の1例

小堺 郁夫・遠藤 正美
山城 研三・富樫 満
熊野 英典・貝沼 知男 (新潟労災病院内科)

症例は64才男性。主訴は腹痛と発熱。近医で白血球増多と CRP 強陽性を指摘され、精査目的で当科受診。腹部 US にて肝左葉の萎縮、肝内胆管の拡張及び門脈内に塞栓を認めた。PTC にて左肝管部の狭窄と末梢肝内胆管の著明な拡張を認めたが、結石は認めなかった。腹部血管造影では門脈内に透亮像があり、門脈左枝は認めず、抗生剤にて保存的に経過観察。20日後の腹部 US にて門脈内塞栓は消失していた。経過良好に推移したが、5ヶ月後の CT にて肝左葉の萎縮は明らかに進行していた。急性胆管炎の治療過程で門脈血流が減少したため、左葉の線維化と萎縮が助長されたことが推定された。胆管炎の自然経過として興味ある症例と思われ、報告した。

28) I型早期胃癌を合併した巨大な脾真性嚢胞症の1例

小黒 仁・横田 剛 (田代消化器科病院)
藤村 夏美・田代 成元 (内科)
松木 久 (同 外科)

症例は79才女性。腹部超音波にて上腹部正中に 20×15 cm 大の内部に腫瘍様の突出を有する巨大な嚢胞を認め精査目的に当院入院。上部内視鏡検査にて胃前庭部後壁に 2×3 cm 大の山田IV型 polyp あり。逆行性膵管造影では膵体部主膵管より嚢胞が造影され、選択的血管造影においては脾動脈の圧排性偏位を認めるのみであった。嚢胞穿刺液は、淡黄色透明のしょう液性で、細胞診では上皮細胞を認めたが、悪性所見は認めず。高齢のため嚢胞全摘は困難で cyst-gastrectomy を作成した。切除された嚢胞の病理組織の検討では、cystadenoma の所見を認めるのみで、悪性所見は認められなかった。他方、gastric polyp はI型早期胃癌で、Polypectomy にて治療した。巨大な serous cyst adenoma で膵管と交通を示した症例を経験し、比較的可能な症例と考え報告した。

29) Expandable Metallic Stent にて予防的減黄術を施行した無黄疸進行胆管癌の1例

遠藤 正美・富樫 満
山城 研三・小堺 郁夫
前川 弘行・熊野 英典
貝沼 知男 (新潟労災病院内科)

今回我々は無黄疸の状態で見えられた肝門部進行癌に対して、ステントを用いて狭窄胆管の拡張術を行い、良好な成績を得ることができたので報告する。

症例は65歳の男性。黄疸がなく、腹部不快感を主訴とし、検査結果で胆道系の酵素異常が認められた。腹部エコー、CT で右肝内胆管が拡張、ERCP で右肝管は完全閉塞、左肝管が狭窄していた。肺には多発性に転移が認められた。Strecker 型のステントを狭窄部に留置し5か月経過した現在も黄疸はなく、PS は良好である。Expandable Metallic Stent を用いた Biliary Endoprosthesis は患者の QOL を高めるのに有用である。

30) Expandable Metallic Biliary Endoprosthesis (EMBE) 閉塞後に内瘻チューブを併用し経過良好な胆管癌の1例

丹羽 正之・石黒 淳
加藤 俊幸・斉藤 征史 (県立がんセンター)
小越 和栄 (新潟病院内科)

症例は78才、男性。肝内内部胆管癌の診断にて PTC-D